

神戸ルーテル神学校校長就任記念論文

石崎伸二

テーマ:「聖餐の信仰生活における位置付け」～召しを励ます聖餐の恵み～

はじめに

アメリカインディアナ州にある Concordia Theological Seminary の S.T.M.課程で学ぶように導かれたのは 2013 年のことであった。この神学校で学ぶとき、最初に考えたのは「恵みの手段(御言葉と聖礼典) Means of Grace」と「召し Vocation」はどのように関係しているのかということであった。なぜなら、私の所属する西日本福音ルーテル教会は「恵みの賜物」という理解でこれまで教会形成をし、信徒教育をしてきたので、「恵みの手段」についてはそれほど強調されてこなかったからである。しかし、神学の学びの中でルター派の「恵みの手段」について、その重要性を確認してきた。それと同時に、礼拝で恵みを受け、礼拝から遣わされ、生活の場であって、日々クリスチャンとして与えられた召しに生きることの大切さを認識するようになった。今回は、聖餐のクリスチャン生活における位置付けや、聖餐の重要性を信徒が知るための教会教育について考えてみた。そのきっかけとなったのは、ルターの「愛は聖餐の実である」¹という文章であった。

また、「このように信仰が絶えず新しく更新される場所では、同時に隣人への愛の中で心が新しく更新され、すべての良い働きをし、罪と悪魔のすべての誘惑に抵抗するために強くされ、備えられる。信仰は怠惰になることはできないので、善を行い悪を避けることによって愛の実を示さなければならない。」²との言葉にも出会った。罪の赦しを受けた者は必然的にそのような状態になっているのであるが、そのことをただ知るだけでなく、それを生きるということが重要である。古い人は死んで新しい人が生きているということを信仰によって受け止めるということである。そのためにも小教理問答をはじめとした教会教育においてよく教えることがなければ意味が理解できない。自分は救われているという確かな土台の上に、生き生きとした信仰生活を築いていくにはどうしたらよいのだろうか。そのようなことを考えているうちに、さらにドイツミサ(1526年)の post-communion collect において、「聖餐後の祈りこそが礼拝の中心であり、聖餐によって私たちに与えられる神のサービスと、この世の人々に仕える私たちのサービスをつなぐもの」という文章に出会い、研究へと導かれた。聖餐式が月に一回しかない日本の多くの教会において、礼拝の要素である「御言葉と聖礼典」の片方だけが実施されている現状を見ながら、クリスチャン生活における聖餐の位置付けや、その重要性を教えるための教会教育について、考えてみたい。

¹ AE51:95

² AE38:126

第1章 聖餐の理解と位置付け

1. 日本の教会における聖餐の位置付け

御言葉と聖礼典が「恵みの手段」であり、それによって神は恵みを与えてくださる。しかし、多くのプロテスタント教会において、聖餐式は月 1 回あるいは 2 回程度しか行われていないのが現状であろう。さらに、年に数回という教会もある。これには当該教団や教会の聖餐論が深く関わっているので、教派ごとの違いが大きい。聖餐をどのように理解するのかによって、その頻度に違いがあるのは当然であるから、本稿では、各教派の比較という視点ではなく、ルーテル教会の現状を考え、信徒の召しを励ます牧会的配慮を中心に考えていきたい。

聖餐の回数少なさについては現代に始まったことではなく、中世の時代でも信徒が聖餐に与るのは、年に 2 回から 4 回という回数であった³。中世の時代には、復活祭などの特別な機会以外は会衆全員が聖餐を受けることはなかった。それは、代表者が聖餐に与るという考え方であったからである。これがプロテスタント教会の実践の源流とも考えられる。⁴現在、ルーテル教会でも毎週聖餐式をしている教会もあれば、月に 1 回程度の教会もある。しかし、普段は事情があつて主日礼拝に来ることができない信徒でも、聖餐式のある日には礼拝に来るといった傾向も少なからず見受けられるので、聖餐の大切さは認識されているのであろう。しかし、信徒の信仰生活が充実しているかどうかを感じるのは聖餐ではなく、別のところだという指摘もある。例えば、教会員同士の良い交わりや温かさ、牧師との関係の良好さ、良い音楽(賛美歌)、心に響く説教などである。聖餐は大切と思いつつも、それがクリスチャン生活を支えているとは思っていないのではないか。聖餐が何を与えるのかもはっきりわからない場合が多い。どこに幸いを感じるかは、個人差が大きく一般化はできない。信徒にとって聖餐は重要であるが、それほどクリスチャン生活に影響している感覚はないかも知れない。しかし、ルターの大教理問答書によると、「あまりにも長い間、これを捨てて顧みなかったり、あるいはこれを避けるような人間は、キリスト者だとはみなされないということを承知しなければならない。キリストがこの聖礼典を制定されたのは、これが見せ物扱いにされるためではなく、キリスト者に命じてこれを食し、

³ Hermann Sasse, *This is my Body*, Augsburg Fortress, 1957, p65.

⁴ Hermann Sasse, *Ibid.* p65.

飲み、それによってご自身をおぼえさせようとのみこころであったからである。』⁵とさえ言われている。また、「福音を聞いている人々はたくさんあるのに、この聖礼典に対しては人々がむとんちやくで、怠惰な態度であるのをわれわれは見ているからである。』⁶と書かれているように、当時も同じような状況はあったようだ。日本の教会では、聖餐は重要なものであるとの認識は高いと思われるが、それが日常のクリスチャン生活にどのように関係しているのかは、これまであまり教えられてこなかったのかも知れない。そのためには説教での励ましが必要であるし、教会教育において教えることも重要であろう。

2. ルター派教会における聖餐理解

カトリック教会の7つの秘蹟に対して、ルーテル教会では聖礼典を「洗礼」と「聖餐」に限定している。ルターは、洗礼や聖餐を御言葉として、つまり、私たちが細心の注意を払って聞き取らなければならない福音として理解しているのである。すなわち、御言葉と聖礼典は、相並んで立つのではなく、むしろ両者は同じ御言葉の異なった形態である。⁷この聖礼典を執行するのが牧師であるが、牧師に特別のカリスマが与えられ、カトリック教会が考えるように、按手によって消えないしるしを受け、パンとぶどう酒を聖体に変える力を与えられるものではないことは注意すべき点である。そのような基本的理解を踏まえたうえで、聖餐について考えてみたい。

聖餐とは、ルターの小教理問答書によると「それはわれわれの主イエス・キリストの、まことの肉、まことの血であって、われわれキリスト者が、パンとぶどう酒とともに食し、飲むようにと、キリストご自身によって設定されたものです。』⁸と記されている。その根拠となる聖書の御言葉は、「われわれの主イエス・キリストは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた。取って食しなさい。これはあなたがたのために与える私のからだである。私の記念として、これを行いなさい。食事ののちおなじようにして杯をとり、言われた。みなこの杯から飲みなさい。これは罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流す、私の血による新し

⁵ 大教理問答書、『一致信条書』聖文舎、1982年、p673.

⁶ 同上

⁷ 徳善義和他『ルターの信仰に生きる』日本ルーテル神学大学ルター研究所、聖文舎、1990年、p34 参照。

⁸ 小教理問答、p503

い契約である。飲むたびに、私の記念として、これを行いなさい」〔第一コリント 11:23~25、マタイ 26:26~28、マルコ 14:22~25、ルカ 22:16~20〕。と示されている。この聖礼典は、人間によって工夫、案出されたものではなく、キリストによって制定されたものである。それはキリストのまことの体と血であるが、神の言葉に包まれ、御言葉に結びつけられたパンとぶどう酒である。御言葉こそがこれを聖礼典とならせるものである。ルーテル教会の聖餐理解にとって最も重要なことは、そこで神のみことばが語られているという事実である。キリストが「これを行え」と言われたのだから私たちは聖餐式を行うのである。ルーテル教会の聖餐に対する理解は、パンとぶどう酒が実質的にキリストの体と血に変化する(化体説)ということでもなく、パンとぶどう酒はキリストの体と血をあらわす(象徴説)ということでもない。聖餐において語られる御言葉によって、パンとぶどう酒とともにキリストが今ここにいてくださる(現在)のである。まさにパンとぶどう酒は御言葉のとおり、「キリストの体と血である」と信じるのである。キリストが「これは私の体である」、「これはわたしの血である」と語られたのだから、それをそのまま受け止めて理解する。「～である」と訳されるギリシア語 ἐστίν は、「～である」以外の意味を持たない。だから、人の言葉や、理性と合わないことで悩まずに、神の御言葉がそのように告げていることを受け止めるのである。どのようにしてキリストが現在するのか、それは私たちの理性を超えているので、キリストに任せればよい。私たちが聖餐にあずかるとき、何が起こるのかと言えば、それは「罪の赦し」である。聖餐によって、私たちは罪の赦しをいただく。一度限りの洗礼によって罪が赦され、新しく生まれるが、なお人間には肉と血において、古いものが並び存している。私たちは、クリスチャンとしての歩みを始めた後も繰り返し罪を犯すものである。それゆえ私たちは繰り返し聖餐を受け、繰り返し罪の赦しをいただくのである。しかし、なぜ聖餐によって罪の赦しが与えられるのだろうか。それは、主イエスご自身が「あなたがたの罪が赦されるために」と聖餐の御言葉の中で語っておられるからである。神の御言葉は必ず実現する。⁹それゆえ、聖餐において私たちは罪の赦しをいただくことができるのである。主イエス・キリストの体と血は、十字架によって与えられたキリストの命そのものである。そのキリストの命は私たちの罪を赦すために捧げられた命であった。だから、私たちはその十字架の命に与る聖餐において、罪の赦しを受けるのである。それを私たちは「これはあなたのために与えられたキリストの体である」、「これはあなたのために流されたキリストの血である」とのみことばを通し、この私のためのものであると受け止め、「アーメン」と答えて受けるのである。私たちの罪の赦しを勝ち取ってくださったところは十字架であ

9 イザヤ 55:11

るが、それが分け与えられる場所が聖餐である。よく、「十字架のもとに行こう」とか、「主イエスの足もとに跪こう」などと聞かすが、それは具体的にはどうしたらよいのかわからない。私たちのほうが十字架に行くことはできないので、時と空間を超えて、主イエスが私たちのところに来てくださっている。だから、私たちは主イエスが言われた聖餐へと行くのである。

聖餐の設定辞の中に、「わたしの記念として」とある。しかし、この「記念として」というのは単なる思い出ではなく、一度限りの救いの御業を覚え、それを宣言していくことである。イスラエルの民が出エジプトの出来事を子孫に語り伝え、今生きる私たちに起こった出来事として語り伝えたのと同じである。今ここに生きている私たちのためのキリストの御業であることを、聖餐において覚えるのである。また、聖餐は、神の国の祝宴の先取りでもあり、すでに召された方々と一緒に集う祝宴のときでもある。それでは、誰がこの聖餐に与る資格があるのだろうか。それは、「これは罪のゆるしを得させるようにと、あなたがたのために与えられ、流されるのだ」との御言葉を信じる者こそ、適しているのである。「あなたがたのために」との御言葉は、純粹に信じる心を要求するからである。また、「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すこととなります。だれでも、自分をよく確かめたうえで、パンを食べ、その杯から飲むべきです。主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです」¹⁰との御言葉がある。「ふさわしくない」のはどのような人であろうか。今日は罪を犯してしまったので聖餐を受けないというのは誤りである。むしろ、自分の罪に苦しんでいる者が聖餐の恵みへと招かれているのである。これは主のまことの体と血であり、これによって主は私の罪を赦してくださいと信じて聖餐に与る者こそが、ふさわしい者である。では、信仰のない人への聖餐はどのように考えられるのであろうか。「これは罪のゆるしを得させるようにと、あなたがたのために与えられ、流されるのだ」との御言葉を信じる者こそ適しているということを考えれば、信仰のない人は聖餐に与ることはできない。キリストは罪の赦しを提供し、約束されているのであるから、信仰による以外の方法ではそれを受け取ることはできない。キリストが「あなたがたのために与え」、「あなたがたのために流す」と言われるとき、キリストご自身がこの御言葉の中に信仰を要求しておられるからである。¹¹

¹⁰ 第一コリント 11:27~29

⁹ 大教理問答書 p672.

私たちはよく「ルター神学」というが、ルター神学というのは、ルターの教えではない。それはイエス・キリストの教えである。教えは主に属するものである。ルターにとっての神学は、御言葉から聞いたことをそのまま信仰告白しているという面が強い。御言葉は生きており、そこに主イエスの命がある。それを聞いて告白するのである。一番良い信仰告白の場は礼拝であり、御言葉を聞くその場で私たちは応答していく。初代教会の頃のおもな問題は、三位一体論とかキリスト論だったが、宗教改革の時代には観点が移って、イエス様の十字架の実がいかにして私たちのところに届くかということであった。初代教会では礼拝が二つに分けられていた。第一部はこれから洗礼を受けようとしている人も含まれていた、第二部は、洗礼を受けた人だけが残った。最も聖なるものは主の体と血だが、そのようなものを食べたり飲んだりしても裁きを受けないどころか、祝福を受けるというのは、洗礼に基づいている。当時、「主の祈り」は洗礼を受けた人だけに与えられた。使徒信条やニケア信条なども 7～8 世紀から礼拝の中で唱えられるようになった。なぜ、洗礼を受けた人しか聖餐式に行けなかったのかというと、神様の聖さはどちらにも働くからである。降圧剤を飲んでも良いのは高血圧の人であり、そうではない人が飲んだら副作用が起こるかもしれないのと同じである。わきまえないで飲んだり食べたりすると裁きをもたらす。だから、神から任命された牧師はそうならないように人々を守り、配慮するのである。聖餐に与る人のため、聖餐がどのように役立つかを考えているのである。もちろん、これはルーテル教会だけではなくて、初代教会からそうしていた。キリスト者でない人も聖餐を受けるとすれば、それは聖餐ではなく、愛餐になってしまうのではないだろうか。

罪の赦しが得られるのは、耳で説教を聞くからなのか、それとも口でいただくからなのか。聖餐は信仰でいただくのか、口でいただくのかと問えば、答えは両方ということになる。パンと葡萄酒か、体と血かと問うならば、答えは両方となる。シュペーナーらの敬虔主義の時代には、罪の告白や赦しの宣言などが少なくなった。牧師から聞く罪の赦しの言葉は、ここで罪が赦されるのではなくて、過去に赦されたことの再確認だと言った。どこかで罪の赦しが起こっていて、ここでは起こっていないことになる。だから、罪の赦しの宣言や聖餐の頻度が少なくなった。宗教改革前の「懺悔(告解)」のように、罪をすべて数え上げたり、罪を深く悲しむことが重要なのではなく、イエス様を信じることが重要である。どれだけ罪を悲しんだらよいのかというと、いつまでたっても悲しみきれないだろう。罪の赦しの確信はどこにあるのか。それは悲しむことではなくて、信仰にある。罪の赦しはどのように達成されたかと言えば、それはイエス様が十字架で達成されたのである。そして、聖餐で罪の赦しを与えてくださる。聖餐や福音の言葉

が宣教されているところでは罪の赦しを与えられているので、そこに行けばよい。罪の赦しのためには聖餐に行くのだとルターは強調している。私たちの罪の赦しを勝ち取ってくださったところは十字架であるが、それが分け与えられている場所は聖餐である。十字架は完成しているので、十字架に行く必要はない。だから私たちは主イエスが言われた聖餐へと行くのである。

3. 聖餐の救済論的重要性

ルターの宗教改革によって説教が強調されるようになったが、ルターは聖礼典中心の礼拝から説教中心へと礼拝改革をしたのではなく、急進的なグループのように礼典を否定したのではない。しかし、今日のプロテスタント諸教会では、説教が礼拝時間の多くを占めるのが普通となり、礼拝時間の半分程度が説教に充てられる場合もある。もちろん教派や神学の違いによって聖餐理解が異なるので、そのような傾向も理解できるが、御言葉と聖礼典の両方を恵みの手段として重んじているはずのルーテル教会においてもこの傾向は否めない。初代教会から御言葉と聖餐は常に教会の礼拝と生活の中心であったし、主の食卓に聖徒の交わりがあった。主日は聖餐を抜きに考えることができない。主日は聖餐の日であったし、聖餐と説教は固く結び付いている。教会の交わりは、まず聖餐の交わりであったし、使徒たちの時代から教会は主の食卓に集められたのである。常に聖餐が教会の中心であったので、様々な問題も聖餐をめぐって起こっていった。¹²それだけ聖餐は重要なものであった。

ローマ・カトリック教会において聖餐は、司祭によって毎回捧げられる犠牲として考えられることから、信徒が陪餐することが中心ではなく、司祭がミサを捧げることが中心となった。人間から神への方向と考えられた。そして、信徒はパンのみの一種陪餐となり、そのパンや葡萄酒は礼拝の対象となっていった。このことに対してルターは反対し、聖餐はキリストが十字架によって成し遂げられた罪の赦しを受け取るものであるとした。まさに聖餐の設定辞¹³にあるように、キリストがあなたのために与える体であり、流す血であるということが中心となる。聖餐は神から与えられる賜物であり、人間が神に捧げる犠牲ではない。だから、それを受けることが非常に重

¹² Hermann Sasse, *Ibid.* pp2-3.

¹³ わたしたちの主イエスは、渡される夜、パンを取り、感謝してこれを裂き、そして言われた。「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしを記念するため、このように行いなさい。」食事ののち、杯をも同じようにして言われた。「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい。」

要なのである。神から与えられるキリストの体と血をいただくのである。まさに、口をもっていただく(*manducatio oralis*)のである。カトリック教会との理解の違いもさることながら、宗教改革後の1529年のマールブルク会談でも、ルターとツヴィングリが聖餐設定辞の「～である(*est*)」で一致せず決裂に至ったことはよく知られている。そこには、どうしても譲ることのできない問題が存在している。ルターが「～である」という聖書の言葉に固執するのには、深い救済論的関心がある。主の「からだと血」が物素に存在することは、主御自身の受肉と密接している。主の受肉が「わたしたちの外なる」(*extra nos*)救済の事実であって、その祝福は信仰状態に依存しない救済の根拠であるが、聖餐における「からだと血」の現在も、試練に動揺する信仰から独立した事実である。¹⁴ルターは、設定辞どおり、まさにパンと葡萄酒とともにキリストのからだと血がそこにあり、それをいただくことを信じたのである。ルーテル教会の信仰もまさにそこにある。おもしろい逸話が残っているが、象徴説をとるツヴィングリは、ルターがキリストのからだと血を聖餐で食し飲むことから、ルターを人肉食者(*Fleischfresser*)、吸血鬼(*Blutsäufer*)、人食い(*Anthropophagos*)と攻撃したが、ルターは、ツヴィングリが聖餐において単なるパンとぶどう酒のみを食し飲むことから、ツヴィングリをパン食い(*Brotfresser*)酔漢(*Weinsäufer*)と攻撃した¹⁵という。聖餐論を巡る論争がいかに白熱したものであったのかを物語っている話である。

4. 御言葉に留まる聖餐

ルーテル教会において、実際にルターの聖餐理解が実践に結び付いているとは言えない現状もある。それを作っている理由の一つには、ルターの聖餐論を軽視する傾向があるのではないだろうか。むしろ、今日のルター神学者たちは、ルター自身の聖餐理解に迫ることよりも、他教派と共存するための新しい理解を追い求めているのではないかと分析する神学者もいる。¹⁶聖餐を考える上で、聖餐における主イエスの現臨の理解は、礼拝全体の理解を変えるほどの大きな課題である。その理解はルーテル教会の聖餐式文に引き継がれている。宗教改革以前のカトリック教会のミサでは、この設定辞は明瞭に聞かれることはなかったであろう。なぜなら、司祭は低い小さな声で会衆に聞き取れないように設定辞を語ったと言われているからである。

¹⁴ 橋本昭夫、『新キリスト教辞典』いのちのことば社、1991年

¹⁵ ルター著、三浦義和訳「キリストの聖餐について 信仰告白」1528年、『ルター著作集第1集第8巻』聖文舎、1971年、p14.

¹⁶ Hermann Sasse, *Ibid.* p9.

¹⁷私たちは、聖餐において、この設定辞を明瞭に聞くことができる。もちろん聖餐を口でいただくのであるが、この設定辞を聞くことが大切にされなければならない。この言葉こそ、まさに福音の要約である。礼拝式において、信徒たちはこの聖餐の設定の言葉を真剣に聞いているだろうか。聖餐とは何かと問うならば、それは「主キリストのまことのからだと血であり、パンとぶどう酒の中に存し、キリストのことばによって、これを食し飲むようわれわれキリスト者に命じられているものである。」¹⁸と大教理問答にある。ルターにとって、1520年以降、聖餐の本当の賜物とその実は「罪の赦し」であることが明らかになったと言われている。¹⁹ルターの小教理問答の「聖壇の礼典」の項目の中で、「このような飲食がどんな役に立ちますか。」との問いがあるが、そこには、「それは、『これは罪のゆるしを得させるようにと、あなたがたのために与えられ、流されるのだ』(ルカ 22:19-20、マタイ 26:28)とのみことばに示されています。すなわち、この聖礼典において、このみことばを通して、われわれに、罪のゆるしと、生命と、祝福とが与えられるのです。それは罪のゆるしのあるところに、生命と祝福とがあるからです。」²⁰と説明されている。まさに、聖餐の設定辞どおり理解するのである。多くの論争がある聖餐理解であるが、この御言葉どおりに解釈するところに罪の赦しがある。私たちの理性では、「どうしてパンと葡萄酒がキリストの体と血であるのか」という答えを見出すことはできない。これに対してルターは、次のように述べている。

みことばから、あなたは良心を励まして次のように言うことができる。「たとえ十萬の悪魔がすべての狂信者たちを引き連れて、『どうしてパンとぶどう酒がキリストのからだと血でありうるのか』と詰め寄っても、私はあらゆる思想家、学者が束になろうと、その賢さは、神の大能の小指の先ほどにも及ばないことを知っている」と。ここにはキリストのことばが厳存する。「取って食しなさい。これは私のからだである」。「みなこの杯から飲みなさい。これは私の血による新しい契約である」と。われわれはこのみことばのもとにとどまり、キリストに対して教師ぶったり、キリストが語られたところと異なる説をする人々をながめようではないか。実際、みことばを取り去り、あるいはみことばなしでこれを見るならば、手にあるものはただのパンとぶどう酒にすぎない。けれどもパンとぶどう酒が、あるべきとおりに、みことばのもとにとどまるならば、その

¹⁷ *Ibid.* p80.

¹⁸ 大教理問答書 p667.

¹⁹ Hermann Sasse, *Ibid.* p113.

²⁰ 小教理問答書 p504.

みことばの力によって、それは真実キリストのからだであり、血である。キリストは偽りも欺きもなしえないかたであるから、キリストの口が語り話されたそのとおりになるのである。²¹

ルターはあくまでも聖書の御言葉に留まろうとしている。聖餐が神の御言葉に基づいていることを次のように説明している。「たとえ、心がよくない物がこの聖礼典を受け、あるいは授けても、その受けるところのものはまことの聖礼典、すなわち、キリストのからだと血であって、最もふさわしい方法でこれを執行する物の場合と全く同じである。(略)それは、この聖礼典が人間の神聖さにではなく、神のことばに基づいているからである。(略)聖礼典を成立させ、またその制定の基となっているみことばは、人がらや不信仰のために偽りとなることはない。」²²このように述べ、その聖餐の設定された本来の目的である効力と効用について、「このみことばは簡単に言えば、『われわれがこの聖礼典にくるのは、それをとおして、またそれにおいて罪のゆるしを得るような宝をいただくためである』と言うのにひとしい。」²³と、聖餐がもたらすのは罪の赦しであることを強調している。

5. キリスト者の生活を励ます聖餐

これまでみたように、聖餐は罪の赦しを私たちにもたらすためのものであることを確認した。同時に、聖餐は私たちのキリスト者の生活を励ますものでもある。私たちキリスト者の状態は、ルターが言うように「義人にして同時に罪人」(*simul justus et peccator*)である。洗礼によって新しく生まれるのであるが、同時に古い人が存在していることを経験する。その古い人と新しい人が葛藤しているのがキリスト者の信仰生活の実態であろう。そこに悪魔の妨害や攻撃があり、私たちは疲れ果ててしまうことがある。そのようなとき、「信仰が回復し、強められて、このような戦いのさなかにあって転落することなく、ますます強さを加えられるようにと、この聖礼典は日ごとの食物として与えられるのである。なぜなら、新しい生命は常に増大し、進展するような状態におかれねばならないからである。」²⁴とルターは説明している。「罪のゆるしのあるところに生

²¹ 大教理問答書 p668.

²² 同上、pp668-669.

²³ 同上、p669.

²⁴ 同上、p670.

命と祝福とがある」²⁵ので、聖餐を日ごとの食物のようにいただくことで繰り返し罪の赦しをいただき、信仰が励まされるのである。聖餐式において、牧師が赦しの宣言²⁶をするのであるが、飲食とともにこの言葉が非常に重要である。ルター派の礼拝では、「罪の告白と赦しの宣言」というプログラムがあるが、その中で牧師は、「憐れみ深い全能の神は、あなたのすべての罪を赦すために、独り子を死に渡されました。ですから、私はキリストのしもべとして召された者として、またその権威によって、父と子と聖霊の御名によって、あなたのすべての罪を赦します(あるいは、「あなたの罪は赦されました。」)。と宣言する。「あなたの罪は赦されますよ」という情報もなく、「あなたの罪が赦されますように」という祈願でもなく、「あなたの罪を赦します。」あるいは、「あなたの罪は赦されました。」という宣言を聞くのである。この宣言を牧師から二人称の言葉で直接受けることは、私たちの魂に大きな平安をもたらす。主イエスが言葉を発せられると、そのとおりのことが起こる。その言葉が現実となるのである。神が言葉によって太陽や月を創造されたのと同じように、主イエスが「このパンは私の体である」、「この杯は私の血である」と最初の主の晩餐で言われた時、新しいものが創造されたのである。²⁷主の御言葉が新しい現実を創造する。それだけに、聖餐の設定の言葉は非常に重要である。²⁸聖餐の設定辞こそが福音である。ルターは、1521年の「ミサの誤用について」において、「設定辞は福音全体の短い要約として、すべてのキリスト者に教えられ、心に浸透されるべきである。」²⁹と述べている。まさに福音の中心とも言える聖餐であるが、それは誰が受けるのか。大教理問答書によると、「キリストご自身が言っておられる、『じょうぶな人には医者はいらない。いるのは病人である。』(マタイ9:12)と。すなわち、罪と死の恐怖、肉と悪魔との誘惑のために苦しみ悩む者がこれを求めるのである。もし重荷を負っていて、しかも自分の弱さを感じるのであれば、喜んで礼典に赴き、元気と慰めと力を授けられよ。けれども、こうした重荷から解放されて、その後、きよく、価値ある状態でこの聖礼典に赴こうとして、その時の来るまで待つつもりなら、永久にこれにあずかる機会はない。」³⁰とある。そのとおり、罪の重荷や自分の弱さに悩む者こそ聖餐を受けるのにふ

²⁵ 同上、p504.

²⁶ 筆者の教会では次のような言葉で赦しの宣言をしている。「わたしたちの主イエス・キリストの体と、その尊い血は、あなたがたを強め、守り、永遠の命に至らせてくださいます。あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。」これに対して会衆は「アーメン」と応答する。

²⁷ Antti Raunio, *Faith and Christian Living in Luther's Confession Concerning Christ's Supper*(1528), *Lutherjahrbuch*, Volume:76, 2009, p31.

²⁸ Antti Raunio, *Ibid.* p27.

²⁹ AE36, p183.

³⁰ 大教理問答書 pp678-680、681.

さわしいのである。また、ルターは「あなたが悲嘆にくれ、あるいは、あなたの罪があなたを駆り立てるときには、 sacrament に行くとか、ミサを聞くとかして、この信仰を練り、強くするように気を用いなさい。この sacrament とその意義とを心から熱望して、 sacrament が指示しているとおりにあなたに起こっていることを疑わないようにしなさい。」³¹と述べている。聖餐を受けるのは、御言葉のままを信じ、御言葉のもたらすものを信じる人である。キリストは罪の赦しを提供し、約束されているのだから、信仰以外の方法ではそれを受け取ることはできない。³²聖餐の設定辞にあるとおり「私を覚えて」ということと、「あなたがたのために」ということが非常に重要である。³³キリストが「あなたがたのために与え」、また「あなたがたのために流す」と言われるとき、キリスト御自身がこの御言葉の中に、このような信仰を要求しておられるのである。³⁴キリストこそが、今の私たちの状態をよくご存じで、御自身を与えることでその罪を赦し、新しい力を与えてくださるのであるから、私たちは聖餐へと行くのである。洗礼によって新たに生まれたキリスト者ではあるが、先に述べたように古いものが依然として残っているのも事実である。そこに悪魔とこの世から盛んに妨害と攻撃があるので、疲れ、つまづくことがある。そのような戦いの中にあつて、聖餐によって強められ、新しい生命が進展するのである。³⁵キリスト者にとって、聖餐の設定辞の正しい理解は非常に重要である。³⁶

6. 聖餐への飢え渴きを感じない人へ

では、そのような大切な聖餐であるが、聖餐への飢え渴きを感じない人に対してはどうすればよいのであろうか。大教理問答書にも「福音を聞いている人はたくさんあるのに、この聖礼典に対しては人々がむとんちやくで、怠惰な態度であるのをわれわれは見ているからである。」とある。³⁷ 当時も今も同じようである。信仰だけあれば十分だとか、様々な理由から聖餐を受けることについてあまり重要視しない人もいるのは事実である。しかし、ルターはさきに見たように、「あまりにも長い間、これを捨てて顧みなかったり、あるいはこれを避けるような人間は、キ

³¹ ルター著、石本岩根訳『キリストの聖なる真のからだの尊い sacrament について、および兄弟団についての説教(1519年)』「ルター著作集第1集第1巻」、聖文舎、1964年、p649-650.

³² 大教理問答書 p672 参照。

³³ Luther, *Admonition Concerning the Sacrament of the Body and Blood of Our Lord 1530*, AE38, p125.

³⁴ 大教理問答書 p672 参照。

³⁵ 同上 p671 参照。

³⁶ Antti Raunio, *Ibid.* p27.

³⁷ 大教理問答書 p673.

リスト者だとはみなされないということを承知しなければならない。キリストがこのような聖礼典を制定されたのは、これが見せ物扱いにされるためではなく、キリスト者に命じてこれを食し、飲み、それによってご自身をおぼえさせようとのみこころであったからである。」³⁸と述べている。また、ルターは、「人が怠惰や不精に陥らないように、絶えず説教で励ますことが必要である」³⁹と言う。「聖礼典への飢えも渇きも覚えなるときにはいったいどうしたらよいか」という質問に対しては、「自分でこれらのものを感じないような心の状態の人々に対しては、自分にはたして肉と血を持っているのだろうか、胸に手をおいてよく反省してみるがよいというよりほかによい勧告を私は知らない。そして、もし肉と血とを持っていることがわかったら、パウロのガラテヤ人への手紙を開いて、自分の肉がいったいどんな実を結ぶものであるかを聞いてみるのがいちばんよい。」⁴⁰とルターは言う。ガラテヤ人への手紙には「肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもです。」⁴¹とある。すなわち、自分の肉の状態に目を向け、それがいかに神の御心から離れているのかを知るときに、その人は聖餐へと赴く心を与えられるであろう。罪人であることを突きつけられ、それを赦してくださるお方のところに行くのである。まさに律法と福音であるが、そのような神の赦しの中を生きるのが聖化である。したがって、牧師は、この聖餐が私たち人間のために制定された神の恵み深い父親としての聖礼典であることを理解し、確かに信じるように、聖餐に行くことの第一の理由を人々にはっきりと伝える必要がある。⁴²現在のプロテスタント教会各派では聖餐の回数に違いがある。聖餐は何度も受けるべきものであろうか。その点について様々な議論があるが、キリストが「あなたがたが行うごとに」⁴³と言われた御言葉に注目する必要がある。「あなたがたが行うごとに」との御言葉があるので、しばしばそれを行うことが命じられているのである。そしてこの御言葉が添えられたのは、キリストがこの聖礼典を、ユダヤ人の過ぎ越しの祝いの小羊とは違って、特別の時期に縛られることなく自由に行われることを望まれるからである⁴⁴とルターは言う。

³⁸ 同上 pp673-674.

³⁹ 同上 p674.

⁴⁰ 同上 p680.

⁴¹ ガラテヤ 5:19-21.

⁴² Luther, *Admonition Concerning the Sacrament of the Body and Blood of Our Lord 1530*, AE38, p104.

⁴³ 第一コリント 11:26 ὁσάκις γὰρ ἐὰν ἐσθίητε τὸν ἄρτον τοῦτον καὶ τὸ ποτήριον πίνετε,

⁴⁴ 大教理問答書 pp674-675.

7. 聖餐は礼拝と信仰生活の蝶番

キリスト者は、礼拝において恵みの手段(御言葉と聖礼典)を通して主の恵みに与り、そこからこの世へと派遣されていく。派遣されていった場には家族や社会がある。日本において、そこは異教徒の集合体とも言えよう。その中でキリスト者として生きていくのである。私たちは自分の力でキリスト者になったのではなく、主が召してくださり、信仰を与えてくださった。だから、キリスト者になった後も、自力で頑張っって信仰生活に励むのではなく、主の導きの中で、主の祈りを祈りつつ歩む礼拝の民である。全くの受け身でいただいた恵みを携えてこの世に遣わされ、人々の間にあって生き生きと歩んで行くために、礼拝と信仰生活をつなぐ接点があるはずである。それが、まさに聖餐式において、配餐を終えた後になされる祈り(post-communion collect)に現れている。礼拝式文を用いているルーテル教会では、教会によって多少の違いはあるが、筆者の教会では次のように祈っている。

「全能の神よ。この救いの賜物をもって、私たちに新しい力を与えてくださったことを感謝します。恵みによって、私たちがますます主を信じ、互いに愛をもって仕えることができますように、私たちを強めてください。あなたと聖霊と共に、ただひとりの神であり、永遠に生きて治められる、御子、主イエス・キリストによって祈ります。アーメン。」

この祈りは礼拝の中心的な位置にあり、聖餐における神の私たちへのサービスと、この世における私たちの隣人へのサービスの蝶番(ヒンジ)のような祈りである。⁴⁵聖餐で受けた救いの恵みによって力を与えられ、その恵みを携えてこの世に遣わされていくことを確認し、確信するのである。まさにこの祈りによって、聖餐を受けた私たちの目が外へと向けられ、人々を愛し、仕えていこうという思いが強くなるのである。礼拝はキリスト者のすべき義務として参加し、日常生活はそれとは別に営んでいくということではなく、礼拝とキリスト者の日常生活は密接に続いている。週日は主日礼拝や聖餐を待ち望みつつ隣人を愛し、隣人に仕えて歩み、主日礼拝で恵みを与えられ、教会から週日の歩みへと押し出されていく。まさに、人が与えることのできない大きな救いの恵みを礼拝によって与えられ、遣わされた者としてこの世を歩むのである。Ratke は次のように言う。「教会が目標を達成するためには、 sacramentの継続的な使用が鍵

⁴⁵ John T. Pless, *Taking The Divine Service Into The Week: Liturgy And Vocation*, 2001, p3.

となる。御言葉と聖礼典だけで十分である。教会の任務は、御言葉と聖礼典の傘の下で、すべての善き業を結合することである。」⁴⁶教会の信徒たちは、癒しや罪責感からの解放や、和解などの課題をもって礼拝に集うことがある。そこで、礼拝において語られる律法と福音の御言葉の説教や、与えられる聖餐をとおして魂に平安が与えられる。毎週の礼拝の中で「罪の告白と赦しの宣言」ができるのなら幸いである。それをそのまま普段の牧会にも適用することができるであろう。牧会訪問の際に聖餐の準備をして行き、信徒の家庭での聖餐をすることや、赦しの宣言をすることも有効である。それはすべての牧会配慮のもとである主イエス・キリストと信徒たちをつなぐ絆である。礼拝の中で受ける聖餐と同様、それを悩み苦しむ信徒のところへと携えて行き、それによって慰めや平安を与えることができる。ルターは 1521 年の “The Misuse of the Mass” の中で、「福音は何かと聞かれたら、キリストが彼の体と血を私たちの罪の赦しのために与えてくださったという新約聖書の言葉以外に良い答えはない。このことのみがクリスチャンに語られるべきであり、彼らの心に植え付けられるべきである。」⁴⁷と述べている。聖餐の大切な部分は、神がそれをなして下さるということである。御言葉こそが決定的に重要であり、聖餐の設定辞こそがまさに福音の要約といえる。信仰生活においては、いつも古い人と新しい人との葛藤がある。葛藤のただ中にある信徒に牧師は様々な牧会の方法を用いるが、むしろ聖餐に与るようにと勧めることが非常に有効な牧会ではなかろうか。洗礼を受けた後にも、私たちの肉のうちに残る罪があるので、これらの罪に対し、私たちを強め励ますために神は聖餐を与えてくださっているのである。肉との戦いに勝利するためには自力ではなく、キリストが与えてくださった聖餐に行くことである。それによって罪が赦され、新しい力が与えられるのである。したがって、聖餐を受けることは、クリスチャン生活における必要不可欠なものである。⁴⁸

⁴⁶ David C. Ratke, *Confession and Mission, Word and Sacrament*, Concordia Publishing House, 2001, p115.

⁴⁷ AE36:183

⁴⁸ Antti Raunio, *Ibid.* p26.

第2章 キリスト者に与えられた召しについて

1. 召し(vocation)とは何か

私たちは神から召し(vocation)を与えられている。宗教改革前の考えでは、聖と俗があったが、ルターがこれを取り払ったといえよう。罪が入る前の人は、神を愛し、命じられた働きを喜んでなしていた。ところが、罪が入り、働きが苦しいものとなった。しかし、その罪が赦され、取り去られることで本来の働きができるようになるのである。ルターが召し(vocation)に関して論ずる場合には、おもに3つの領域(Three estates: 教会、家庭、社会)が考えられている。そのように、一人の人に複数の召しを与えられている。例えば、夫として、父親として、子供として、職場の一員として、社会の一員としてなどである。クリスチャンは、教会の礼拝で、恵みの手段(みことばと聖礼典)をとおして神の恵みを受け、罪が赦され、新しいいのちに生きるものとされる。私たちは、「恵みにより、キリストのゆえに、信仰をとおして罪の赦しをいただき、神の前に義とされる」⁴⁹のであり、義とされた者は神への信仰と感謝をもって、教会からこの世へと遣わされ、互いに愛し合い、仕え合って生きていく。奉仕もそのような感謝の心をもってなされる。もちろん、奉仕によって神に認めてもらうことが目的ではなく、人々を具体的に助けていくのである。神には信仰と感謝を、人々には愛をもって仕えるのがキリスト者の生活である。そのためには、礼拝で恵みを受け続けなければならない。まず、私たちはキリストの贖いによって、罪の赦しと永遠の命を恵みとしていただいていることに目を留める。これは受動的な義である。自分の側の一切の行いによらず、ただ神が恵みによって神が私を救ってくださったことを信仰と洗礼によっていただくのである。そこに「喜ばしい交換」⁵⁰が生じ、私はキリストの者となるのである。すなわち、小さなキリストとして生きる者とされる。しかし、キリスト者はそのような者として教会の中に留まっているのではなく、教会からこの世へと遣わされていく。そこにいるのは隣人である。このように、私たちは受動的な義をいただいて神の子とされた後、隣人のところに遣わされるのである。まずは良い木としていただき、その後、人々の間で生きていくという順番は非常に重要である。その際、キリストが模範となるのであるが、最初からキリストが模範なのではなく、まずは神からの贈り物として受け取ることが大切である。良い木であり続けるために「恵みの手段」と言われる「御言葉」と「聖礼典(洗礼と聖餐)」に与り続ける礼拝の歩みが不可欠である。良い木

⁴⁹ アウグスブルク信仰告白第4条『一致信条書』聖文舎、1982年、p35-36.

⁵⁰ ルター、石原謙訳『キリスト者の自由』岩波文庫、1955年、p21.

であるということは、すなわち義とされているということ、キリスト者であるということであり、キリストの義の衣を着せられているということである。それは恵みの手段を通して来るので、いつも恵みの手段に留まり続ける必要がある。聖書に「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」(ローマ 10:17)とあるとおり、一番大切なことはキリストの言葉を聞くことである。ルターは『ガラテヤ大講解』でこのように述べている。

だが、キリスト教の真の意味はこうである。すなわち、人がまず律法によって、自分は罪人であることを認め、自分にはどんなよい行ないをすることも不可能であることを認識することである。律法はこう言う、「あなたは悪い木である。だからあなたが考え、語り、行なうすべてのことは神に逆らう。それゆえあなたは自分の行ないによって恵みをかちとることはできない。もしそうしようと試みると、あなたは悪いことをもっと悪くしてしまふ。なぜなら、あなたは悪い木なので、悪い実、すなわち罪しか実らせることができないからである。『信仰から出るのでないものは、罪である』(ローマ 14 章 23)。それゆえまず行ないを先行させ、それによって恵みをかちとろうとすることは、罪をもって神を喜ばせようとすることである。⁵¹

ある人が、律法と福音の説教を聞き、罪を示され、イエスを救い主と信じ、洗礼を受け、義とされたとき、その人ははじめて善い業を行うことができる者とされる。だから、その義に留まり続けることが必要である。なぜなら、人間の本性はいつも神から離れようとするからである。良い実を結び続けるキリスト者であるためには、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」(ヨハネ 15:5)と御言葉にあるように、イエスから離れてはいけない。なぜなら、イエスを離れて行うことは善い業ではないからである。では、イエスはどこにおられるのか。イエスは恵みの手段である御言葉と聖礼典におられる。だから、私たちも恵みの手段をとおして与えられる恵みに与り続ける必要がある。私たち

⁵¹ ルター、徳善義和訳『ガラテヤ大講解・上』「ルター著作集」第2集第11巻、聖文舎、1985年、p190.

は受け身の信仰なしに能動の信仰を持つことはできない。まず、神はみことばと聖礼典によって私たちを養ってくださるのである。⁵²そして、それをいただくのが礼拝である。特に、聖餐が私たちの日常生活における召しを励ますのである。それは、感覚的なものではなく、聖書の真理からくるものであるから、そのことを信じる信仰が大切になってくる。

2. 罪の赦しと召しの関係

Billing は、「召しは罪の赦しを土台としている。地上における神の子である私たちが、神の国の働きに参加することになるので、罪の赦しだけが私たちに召しを与えることができるのである。」⁵³と言う。また、Wingren は、「召しは天にではなく、この世に属しており、神にではなく隣人に向けられたものである。」⁵⁴「神は私たちの善い行いを必要としないが、隣人は必要とする。神が必要とするのは信仰のみである。」⁵⁵と述べている。神の前では、キリスト者は常に受動的であり、隣人の前では能動的である。⁵⁶すなわち、私たちが家庭や社会で隣人に対して行う行為は、神に対してではなく隣人に対して行うものである。罪を赦された小さなキリストとして、隣人に益するような行為を行うのであり、その土台は罪の赦しである。ルターの召しの理解は礼拝の神学と共にある。⁵⁷ルターにとって信仰と愛の区別は、礼拝と召しの両方において必要である。礼拝において、信仰はキリストの賜物を受け取る。召しにおいては、キリストが私たちにご自身を与えてくださったように、愛も隣人に与えるのである。⁵⁸キリストが十字架上で私たちのために自分を犠牲にしてくださったように、私たちが愛のために隣人に自分を犠牲にして捧げる。このことをルターは、1522年3月15日にヴィッテンベルクでの四旬節第一主日の説教での第7講話で次のように言っている。「この聖餐の実、それは愛である。すなわち、神がわれわ

⁵² Preus I. Klemet, *The Fire and the Staff: Lutheran Theology in Practice*, St. Lois, Concordia Publishing House, 2004, p189.

⁵³ Einar Billing, *Our Calling*, Augustana Press, 1955 参照

⁵⁴ Gustaf Wingren, *Luther on Vocation*, Wipf & Stock Publishers, Eugene, Oregon, 1957, P10.

⁵⁵ Wingren, *Ibid.* p10.

⁵⁶ Wingren, *Ibid.* p15.

⁵⁷ John T. Pless, *Ibid.*, p4.

⁵⁸ *Ibid.*, p4.

れを扱ってくださったように、われわれも隣人を扱うべきであるということである。私たちが神から受けたものは愛と好意だけである。キリストはご自分の義と持っているものすべてを私たちに与えてくださった。神はそのすべての宝物を私たちに注いでくださった。それは、どんな人も測ることができず、どんな天使も理解したり、計り知ることができない。神は、地から天にまで達する愛の輝く焔なのだから 愛は聖餐の実であると私は言う。」⁵⁹すなわち、礼拝で受けた恵み、特に聖餐で受ける恵みを携えてこの世へと遣わされ、キリストが私たちを愛してくださったように、私たちが隣人を愛して生きるのに必要なのは愛であり、その愛は聖餐の実として与えられるというのである。もし、このことを理性や感覚で把握することができなくても、そのように信仰で受け止めて生きることが必要である。

3. 葛藤の中を生きる

私たちは、罪人としての自分の力に絶望し、神のみに信頼し、古い人に死に、新しいいのちに生きることが必要である。そこに古い人と新しい人との葛藤が常にある。パウロは「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。」(ローマ 7:15)と言っている。また、「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。」(ローマ 7:18)とも言う。このように、確かに信仰と洗礼によって新しい人になっているはずなのに、依然として私たちは古い人と新しい人の葛藤の中にある。信仰によって義とされた人は新しい人になる。聖霊が彼を動かすが、信仰は一度にすべてを変えるのではない。古い性質はまだ完全に死んではいないからである。⁶⁰キリスト者は信仰に生きながら、なおも肉において生きている。肉は信仰の命に反抗し、常に信仰を攻撃する。したがって、キリスト者の信仰生活は、聖霊と古い人との戦いであり、信仰と古い人の欲望との絶え間ない戦いである。肉に対するこの戦いに信仰が参加しない場合、肉は信仰の支配者となり、それを殺

⁵⁹ AE51:95

⁶⁰ Paul Althaus, *The Ethics of Martin Luther*, Minneapolis, Fortress Press, 2007, p19.

す。信仰生活そのものをめぐって、この戦いに参加するのはキリスト者だけである。この種の葛藤は、信仰と聖霊がまだ人に宿っていない限り、自然には存在しない。そのような人は抵抗することなく邪悪な欲望に従う。しかし、信仰と聖霊は肉の欲望に抵抗する。キリスト者の生活はこの葛藤によって形成されるのである。⁶¹この世で生きるキリスト者には、この世との摩擦や抵抗があつて当然である。なぜなら、罪人の中で生きているからである。それと同時に、自分自身の内にある古い人と新しい人の葛藤の中で生きているのである。説教における律法と福音によって罪人である古い人が殺され、新しい人が成長するようにしなければならない。自分が罪人であることがわかればわかるほど、義認の喜びがわかってくる。聖餐もしかりである。神によって義とされたキリスト者は、教会の礼拝に留まっているのではなく、祝祷をもってこの世に遣わされて行く。それは、隣人に愛をもって仕えるためである。そこに私たちの召し(vocation)の生活がある。神は私たちの善い業を必要としないが、隣人はそれを必要としている。神が求めるのは信仰のみである。⁶²キリスト者は自分自身においては生きないで、キリストと隣人とにおいて生きる。キリストにおいては信仰によって、隣人においては愛によって生きるのである。⁶³召しの目的は、隣人を愛し仕えることである。⁶⁴みことばと聖餐によって恵みをいただき、罪赦され、義とされたキリスト者は、教会から隣人の待つところに派遣され、そこで仕えていく。また、その隣人のところにキリストは隠れて待っておられ、私たちが隣人に対して行ったわざを、あたかも主御自身にしたかのように受け入れてくださるのである。⁶⁵「最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」と主は言われる。しかし、善い業というものはそのような主の姿を想像しながら隣人に行っているものではなく、全く隣人の益のみを考えて行うものである。善い業は神のためではなく、隣人のためであり、それは信仰の実である。⁶⁶私たちは洗礼によって新しい人となるが、依然として古い人(古いアダム)が荒れ狂う。この古い人との戦いに疲れてしまうときがあるが、聖餐が新しい人を回復させるのである。⁶⁷

⁶¹ Paul Althaus, *Ibid.* p20.

⁶² Gustaf Wingren, *Luther on Vocation*, Muhlenberg Press, 1957, p10.

⁶³ 徳善義和、前掲書 p281.

⁶⁴ Gene Edward Veith, Jr., *God at Work*, Crossway Books, pp39-40.

⁶⁵ マタイ 25:40.

⁶⁶ Veith, *Ibid.* p65.

⁶⁷ Antti Raunio, *Ibid.* p51.

ルターは有名な「キリスト者の自由」において、「人間はこの地上においては、身体をもってひとり生きているばかりでなく、他の人々の間でも生きている。それゆえ、人間は他の人々に対して行いなしでいることはできないし、行いが義や救いのために必要でないとしても、他の人々と話したり、かかわりをもったりしないわけにはいかない。だからこれらすべての行いにおいては、意図は自由でなければならず、その行いをもって他の人々に仕え、役に立とうという方向にだけ向けられていなくてはならない。つまり、他の人々に必要なこと以外は考えないわけである。これがキリスト者の真実の生活であって、聖パウロがガラテヤ人に教えているように(ガラテヤ 5:6)ここでは信仰は喜びと愛をもって行いの中に入っていくのである。(略)各人は自分自身のためには自分の信仰だけで十分であって、その他すべての行いと生活とは、自由な愛をもって隣人に仕えるために残されている。」⁶⁸と語っている。そのように、人はこの地上においてひとりで生きているだけではない。霊的にも、ひとりで神の前に立つとともに、キリストとの、また、兄弟たちとの霊の交わりをもつ。人はまさしく「人間」として、人と人との間に生きるものである。だから人は霊的にばかりでなく、身体的にも他の人々とかかわりなしにいない。話したり、行ったりすることはすべて、他の人々とのかかわりの中で起こることであって、そこに人間関係が生まれてくる。信仰は内的なものにとどまらず、外に現れてなにかが起こるできごととして、信仰者を新しくするのである。⁶⁹

ルターによる「キリスト者の自由」の冒頭の言葉はよく知られている。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、だれにも服しない。キリスト者はすべてのものに仕える僕であって、だれにでも服する。」⁷⁰という矛盾する命題である。しかし、これこそがキリスト者の内なる姿と外なる姿をよく現していると言えよう。キリスト者は全く自由なのであるが、自分の隣人を助けるために、反対に喜んで自らを僕とし、神がキリストをとおして自分とかかわってくださったとおりに、隣人と交わり、またかかわる⁷¹のである。そのようなキリスト者に出会う時、人々は良

⁶⁸ 徳善義和、前掲書、p248.

⁶⁹ 同上、p249.

⁷⁰ 同上、p51.

⁷¹ 同上、p255.

い印象を持つであろう。それは、自分の頑張りとか、自分の人生哲学といったものではなくて、まさに受動的にキリストからいただく義によって生じるものである。中世の修道院のように、この世と隔絶して生きるのではなく、「信仰をもって」この世で「普通に」⁷²生きるのである。そのとき、小さなキリストである私たちを通して人々はキリストに出会うことになる。使徒の働き 2 章 46-47 節に次の御言葉がある。「そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。」このように、民全体から好意を持たれることはキリスト者にとって大切なことであり、なお、それは礼拝の恵みによってもたらされていることに注目したい。

⁷² 同上、p270.

第3章 聖餐教育の必要性

1. 教会における聖餐教育

これまでみてきたように、洗礼を受けてキリスト者となった者は、自動的に成長していくのではなく、常に古い人と新しい人の葛藤の中を生きている。その古い人を殺し続けることが必要である。しかし、それは自分の努力や頑張りで達成できるものではないし、罪の赦しは自分自身の力によらない。罪の赦しのあるところに命があるので、常に罪の赦しをいただき続けることが必要である。神の恵みを受けないまま、人々の間にあつて善い業を行おうと努力しても、それはむなしい。あるいはその業によって救いを勝ち取ろうとするような間違った考えに導かれる可能性もある。それは受動の義と能動の義の混同であるし、贈り物と模範の逆転である。キリスト者は、「義人にして同時に罪人」(*Simul Justus et Peccator*)の状態で生きているので、常に御言葉を聞き、聖餐に与ることで罪の赦しと永遠の命を確信し、人々に仕えていこうという思いが強くなる。いつも御言葉と聖礼典という恵みの手段に留まり、自分の力に絶望し、神に完全に明け渡しつつ、与えられた新しい命を生きていくのである。そのために聖餐があるのであるが、その意味を、聖餐を受ける者自身がよく理解している必要がある。

2. 教理問答書の活用

ルーテル教会で通常受洗準備に用いられる「小教理問答書」がある。しかし、キリスト者となった後にあまり用いられないということも聞く。これは、初心者だけに必要なものではなく、信仰生活が何年経とうと、繰り返し学び続けるべき小冊子であり、ここにクリスチャン生活のエッセンスが凝縮されている。小教理問答書の「聖壇の礼典(聖餐)」の項目を見ると、次のように書いてある。「このような飲食が、どんな役に立ちますか。」との問いに対して、「それは、『これは罪のゆるしを得させるようにと、あなたがたのために与えられ、流されるのだ』(ルカ 22:19-20、マタイ 26:28)とのみことばに示されています。すなわち、この聖礼典において、このみことばをとおして、われわれに、罪のゆるしと、生命と、祝福とが与えられるのです。それは罪のゆるしのあるところに、生命と祝福とがあるからです。」⁷³と答えている。罪を持った人間が、神の

⁷³ 小教理問答『一致信条書』p504.

召された働きや生活をするために、どうしても必要なのは罪の赦しである。それをいただくところが聖餐だとすれば、ここにすべての中心があるのではないか。日本のルーテル教会において、なぞか聖餐がそれほど信仰生活の中心を占めていないように見えるのは、その大切さが教会において信徒に教育されていないことも一つの要因ではなかろうか。

大教理問答の使徒信条第三条の説明には次のようにある。「もし、福音の説教をとおし、聖霊によって提供され、われわれの心の中に贈られるのでなかったら、あなたも私もいっさいキリストについて知りえず、キリストを信じることも、キリストを主としていただくこともできないであろう。みわざはすでに起こり、果たされている。キリストがその受難と死と復活などによって、われわれのために宝を獲得し、確保なさったからである。けれども、そのみわざがかくされたままになっていて、だれもそれを知らなかったならば、それはむなしく、失われたも同然であろう。そこで、このような宝が埋もれたままにならず、有益に用いられ、享受されるようにと、神はみことばを与えて、これを宣べ伝えさせ、そしてこのみことばにおいて聖霊を与えて、このような宝とあがないとをわれわれに近づけ、授けようとなさったのである。それゆえに聖化とは、われわれを主キリストのもとに伴い、われわれ自信の力では近づくことのできないこのような賜物を受けさせることにほかならない。」⁷⁴同様に、聖餐で受けているものが何なのかよく理解しないまま受けるのは、宝をいただきながらそれが何なのかわからないのと同じである。信仰をもって聖餐を受けるとき、私たちはその豊かな賜物をいただくのであるから、聖餐についての教育は非常に重要だと言えよう。そのために小教理問答や大教理問答を用いることは有益である。ルターによる小教理問答「聖壇の礼典」の項目の扱いは、主の体と血を有益に受ける準備としての牧会的役割があった。彼の牧会的目的は、キリスト者が聖餐とは何か、その賜物を与える祝福は何かを知ることにあった。なぜなら、罪の赦しのあるところに命と救いがあるのだから。⁷⁵

3. 説教による励まし

また、大教理問答には次のように聖餐の重要性を説教で励ますようにとの勧めがある。「確かに、真のキリスト者であって、この聖礼典を尊重する人は、自らの心に促されてすすんでこれに

⁷⁴ 大教理問答『一致信条書』pp615-616.

⁷⁵ John T. Pless, *The Lord's Supper in the Life of the Congregation*, Congress on the Lutheran Confessions, Bloomington, Illinois, 2004, p10.

おもむくはずである。けれども、単純な人々や心の弱い人々で、同じくキリスト者でありたいと願う人々が、彼らをこれへと促しおもむかせる理由と必要性とについて考えるように、もっと刺激を与えるために、その点について少しばかり述べることにしよう。信仰や愛や忍耐に関するほかの事柄でも、ただ教えたり、授けたりするだけでは十分でなく、日ごとに訓戒することが必要であるが、この場合も同じで、人々が怠惰や不精に陥らないように、絶えず説教で励ますことが必要である。」⁷⁶そのような意味において、礼拝は最高の教育であろう。⁷⁷

⁷⁶ 大教理問答『一致信条書』p674.

⁷⁷ David C. Ratke, *Confession and Mission, Word and Sacrament*, Concordia Publishing House, St. Louis, MO, 2001, p128.

おわりに

以上みてきたように、これまであまり検討されることのなかった聖餐と召しの繋がりについて考察した。キリスト者がおかれている場所で、自分の召しに生きるときに必要なのは、隣人への愛であり、その愛こそが聖餐の実である。キリスト者が生き生きと自分の召しに生きようとするとき、それを阻む古い人の存在がある。召しは罪の赦しの上に成り立つものであるから、その古い人との葛藤に勝利し続ける必要がある。しかし、それは自力ではできない。だからこそ、私たちは聖餐へに行くのである。聖餐によって罪の赦しをいただき、小さなキリストとしてこの世に派遣されていく。そのちょうど蝶番のような位置にあるのが、聖餐後の祈り(post-communion collect)である。聖餐の意味やその設定辞の意味をよく理解し、継続して聖餐に与り続けるところにキリスト者の召しに生きる生活がある。聖餐が信仰生活を励ますことは考えられないという意見もあるが、私が神の子とされたということを感じなくても、事実として神の子とされているように、感じるかどうかではなく、信仰で受け止めて生きることが大切である。そのためにも、教会での聖餐教育が必要となる。小教理問答を始めとして、この宝のような聖餐が信徒の間で大切にされる時、そこに生き生きと召しに生きるキリスト者の存在が確立するであろう。

このような機会を与えられ、聖餐と召しの関係について考察することができたことを感謝したい。このことについては、今後も研究課題として続けて学んでいきたいと願っている。

参考文献

【英文】

- Althaus, Paul *The Theology of Martin Luther*, Fortress Press, Philadelphia, 1966.
- _____. *The Ethics of Martin Luther*, Fortress Press, Minneapolis, 2007.
- Bayer, Oswald. *Living by Faith: Justification and Sanctification*. Grand Rapids: William B. Eerdmans, 2003.
- Billing, Einar *Our Calling: A Statement of the Relationship of Christian Faith and Christian Living*, Rock Island, IL., Augustina Book Concern, 1952.
- Gritsch, Eric W. and Jenson, Robert W. *Lutheranism: The Theological Movement and Its Confessional Writings*, Philadelphia, Fortress Press, 1976.
- Hans J. *The Righteousness of Faith According to Luther*, Eugene, Oregon, Wipf Stock, 2008.
- Iwand, David L. Mahsman, *Augsburg Today: This We believe, Teach and Confess*, Concordia Publishing House, Saint Louis, 1997.
- Kolb, Robert and Wengert, Timothy J. *The Book of Concord: The Confessions of the Evangelical Lutheran Church*, Minneapolis, Fortress Press, 2000.
- Luther, Martin: *Commentary on Galatians* (1535), vol. I, (Works, American Edition, Vol. 26), Concordia Publishing House, 1963.
- _____. *The Freedom of a Christian* (1520), (Works, American Edition, Vol. 31), Philadelphia, Muhlenberg Press, 1957.
- _____. *Treatise on Good Works* (1520), (Works, American Edition, Vol. 44), Philadelphia, Muhlenberg Press, 1966.
- _____. *Admonition Concerning the Sacrament of the Body and Blood of Our Lord* (1530), AE38
- Pless, John T. "Vocation: Fruit of the Liturgy" *Logia* (Holy Trinity 2002), 9-20.
- _____. *Taking The Divine Service Into The Week: Liturgy And Vocation*, 2001

- _____. *The Lord's Supper in the Life of the Congregation*, Congress on the Lutheran Confessions, Bloomingdale, Illinois, 2004.
- Preus, Edward. *The Justification of the Sinner before God*. Fort Wayne: Lutheran Legacy, 2011.
- Preus, Klemet I. *The Fire and the Staff: Lutheran Theology in Practice*, St. Lois, Concordia Publishing House, 2004.
- Preus, Robert D. *Doctrine is Life: The Essays of Justification and the Lutheran Confessions*, Saint Louis, Concordia Publishing House, 2006.
- Ratke, David C. *Confession and Mission, Word and Sacrament*. St. Louis: Concordia Publishing House, 2001.
- Raunio, Antti. *Faith and Christian Living in Luther's Confession Concerning Christ's Supper (1528)*, Lutherjahrbuch, Volume:76, 2009.
- Sasse, Hermann. *This is my Body*, Augsburg Fortress, 1957.
- Thompson, Virgil (Edited), *Justification is for Preaching*, Eugene, Oregon, Pick Wick Publications, 2012.
- Veith, Jr., Gene Edward *God at Work*, Crossway Books, 2002.
- Wingren, Gustaf. *Luther on Vocation*, Eugene, Oregon, Wipf Stock, 1957.

【邦文】

- 『一致信条書』聖文舎、1982年
- ルター、福山四郎訳『善きわざについて』「ルター著作集」第1集第2巻、聖文舎、1981年
- ルター、石原謙訳『キリスト者の自由』岩波文庫、1955年
- ルター、山内宣訳『キリスト者の自由』「ルター著作集」第1集第2巻、聖文舎、1981年
- ルター、三浦義和訳『キリストの聖餐について 信仰告白1528年』、「ルター著作集」第1集第8巻、聖文舎、1971年
- ルター、徳善義和訳『ガラテヤ大講解・上』「ルター著作集」第2集第11巻、聖文舎、1985年
- ルター、石本岩根訳『キリストの聖なる真のからだの尊い sacrament について、および兄弟団についての説教(1519年)』「ルター著作集」第1集第1巻、聖文舎、1964年
- 徳善義和訳『ルターの信仰に生きる』日本ルーテル神学大学ルター研究所、聖文舎、1990年
- 橋本昭夫、『新キリスト教辞典』いのちのことば社、1991年